

空を仰げば

泌尿器科学講座 井川 掌

同じような方も多いと思いますが、私は子供の頃からなんとなく空を眺めるのが好きでありました。特に中学生時代に所属した天文クラブ（ちなみに部活はサッカー部です）で流星観測を経験してからは、以来毎年夏のペルセウス座流星群の極大日を楽しみにしています。今でこそ短時間眺めて数個でも流星に遭遇できれば良しとしていますが、中学生の時は結構本格的で写真撮影含めフル装備の上、きちんと記録をしていました。出現時刻、光度、速度、確度、痕・爆発の有無などなど。友人と深夜“ああでもない、こうでもない”と言いながら観測した夏の日々は大切な思い出です。残念ながらここ数年は極大日の天候めぐりあわせが悪く、少し寂しい思いをしています。前任地の長崎市は山で囲まれ死角が多かったので、ここ久留米の広大な視界には非常に期待が持てます。今年はしし座、ふたご座の各流星群も月明かりが無く条件が良いとのことでこれも楽しみです。夜空は流星群以外にも月食（残念ながら次回の皆既月食は2018年）、金星と木星の最接近（7月1日；もう終わってますか）、スーパームーン（今年は9月28日）など話題に事欠きません。一方昼間の空も捨てたものではありません。そう、雲です。雲に関しては、たまたまある本に遭遇して興味を抱くようになりました。実は雲はたったの10種類に分類できて、あとはそれぞれの変種・副変種か特殊なものになるそうです。わずか10種類ですから是非覚えてください。最も高いところに行けるのが巻雲（すじ雲）、巻層雲（かすみ雲）、巻積雲（うろこ雲）の3種。次に高いのが高層雲、高積雲（ひつじ雲）。低いところが乱層雲（あま雲）、積雲（わた雲）、層積雲（まだら雲）、層雲。そして今からが旬の積乱雲（入道雲）。一旦なんとなく覚えると、空を眺めた時に思わず雲の種類を分類している自分に気がきます。そしてもう少し詳しくなると、天候が不順な時などはレア度の高い副変種に遭遇できないか目を輝かせるようになります。そう言いつつも、最近ゆっくり空を仰ぐ機会が減った気がしてもう少し心の余裕を持たねばいけないと反省しています。なにか医学図書館ニュースのエッセイにそぐわない内容になりましたので医学生の方には医学は勿論、広くサイエンスに興味を持ってもらいたいというアドバイスと最後に空に関する個人的に特におすすめの本を2つご紹介して筆をおきたいと思います。

1. 宇宙創成（上下）サイモン・シン著 新潮文庫
2. 雲のカタログ 村井昭夫 写真・著 草思社